

月報

<439号>

ケルン・ボン日本語
キリスト教会
二〇一七年二月一〇日発行

『恐れと畏れ』

佐々木 良子

今年のケルンの晩秋は比較的穏やかで小春日和のような日が続きました。しかし十二月の声を聞く頃には吐く息も白くなり一気に寒さが増し、第一アドヴェントは初雪の中で迎えました。クリスマスは喜び、慰め、希望など様々なことを思い巡らしますが、そこに織りなす興味深い人間模様を垣間見ることが出来ます。

多くの人々が救い主イエス・キリストの誕生を待っていました。実際に駆けつけたのは、羊飼いと博士だけでした。東の方からはるばる旅して来た博士たちは、主イエスに出会い、その場にひれ伏し、主イエスをまことの神、救い主として礼拝しました。預言者ミカを通して与えられた神の約束が本当で、彼らが今まで経験したことのない、大きな深い喜びを経験したからです。彼らは、黄金・乳香・没薬を贈り物として主イエスに献げました。

ルターはこの贈り物のことについて味わい深い説明をしています。「黄金」とはキリストを王として告白することで、それは希望を意味し、「乳香」とは愛に他ならないと教えました。更に想像たくましく続きます。主イエスを残忍なヘロデの手から守るためにエジプトに逃避せざるを得なかったヨセフとマリアの旅程に、この贈り物がさぞかし役に立ったことであろうと。このように救い主の誕生の際には喜び姿と共に、恐れるヘロデ王が浮き彫りにされています。

ヘロデという人物は、ローマ帝国という力を利用して、あらゆる手段を尽くして権力を手に入れ、遂にユダヤの王となった人物です。その為には人を裏切り苦しめるという連続でしたので、常に猜疑心に悩まされ、いつも人を恐れていました。

『ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。』これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。……(マタイによる福音書二章二・四節)と、彼は自分の地位が奪われる不安を覚え博士たちをベツレヘムに遣わし、生まれた場所を知らせるように命じました。もし、キリストがユダヤの本当の王であるなら、自分の存在を脅かすことになるため、幼子イエスを殺そうと考えたからです。敵意が殺意を生み出しました。

このようなヘロデの記事は、喜ばしいご降誕を打ち消してしまうように思えます。しかし、これこそクリスマスメッセージの重要な一コマで、却って彼の存在があるからこそ、私たちは慰められます。喜びの知らせに最初につけた優等生的な羊飼いや博士たちよりも、むしろ罪深いヘロデの方が私たちに近い存在といっても良いと思います。

「ヘロデは残忍で許せない！」と裁くことはできないのではないのでしょうか。現在の自分の地位・名声を守りたい、将来の確固たる保証を手にいれたい……一つひとつ挙げたら限りありません。それらはすべて自己保身に繋がるものです。この世で自分を守ることで精一杯になっている内に不安に飲み込まれている私たちです。果ては人の目を恐れ、猜疑心や妬みに振り回されているにも拘わらず自覚症状がなく、この世の闇を生み出しているのです。

自分の中の闇が周囲を暗くしていることが分からない鈍い私たちです。そのようなことを思うにつけ、この世は小さなヘロデで溢れていることに気づ

かされます。これが所謂神なき世界の姿です。このような闇の中でひしめき合っている只中に主イエスのご降誕されました。ヘロデを含む私たちを救い出す為に、今年も憐れな私たちの元にクリスマスはやってきます。

神は私たちの闇の醜さを採点して裁くために、主イエスをお遣わしになったではありませんか。「あなたのような神がほかにあろうか。咎を除き、罪を赦される神が。……いつまでも怒りを保たれることはない。神は慈しみを喜ばれるゆえに。主は再び我らを憐れみ、我らの咎を抑え、すべての罪を海の深みに投げ込まれる。」(ミカ書七章一八・一九節)弱さも罪深さも全てをご存知で、人々を救いに繋げてくださるのです。見放され、見捨てられる人は誰もいません。神の慈しみと憐れみはこの上ないありがたいさです。

そのような神の偉大な愛を見える形として主イエスを天から送ってくださいました。上へ上へと必死に頂点を目指すこの世の流れとは真逆に、下にと、罪の人間が転落する極みまで降ってこられました。「かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」(フィリピの信徒への手紙一章七・八節)一時だけではなくご降誕された時から十字架にお架かりになる迄、徹底して人間として神と人に仕え切ってくださいましたのです。そして今も。

私たちが天国に到達するまで、最底辺でいかなる人をも支え続けてくださっていますから、背伸びしながら生きなくてもよいのです。支えながら私たちを引き上げてくださるのは神自身です。そうして神の子どもとして御手の中で育まれていく私たちです。「人を恐れる」のではなく、「主を畏れる」人は、神の愛に打ち砕かれて自分の罪を知り、主イエスのご降誕が大きな深い喜びとさせて頂けるのです。



教会創立四〇周年を迎え、今年のクリスマス一言メッセージは「教会と私」をテーマに書いていただきました。

佐々木良子

ケルンボン教会との歩みは僅か二年弱という私ですが、とても濃密で感謝な日々を送らせて頂いております。

教会学校の時間だったと思いますが、ある時クイズを出しました。「私の家族は一人です。本当かウソか?」と。中学生のKさんは「本当」と即答でした。「理由は?」ときくと「だって、教会のみんなは家族でしょ」と。そうです、教会に集う私たちは誰もが「神の家族」です。因みにその時の教会員の人数は一八名でした。教会をそのように思っているKさんの気持ちに触れることができてとっても温かな嬉しい気持ちになりました。そして今は二人名の家族に囲まれて幸いな日々を送らせて頂いています。

毎週礼拝後には、愛情こもった美味しいおにぎりやケーキなど頂きながら皆さまと様々なおしゃべりをしながら過ごすことができるのも日曜日の楽しみです。私の安らぎと力の源の場でもあります。

しかし、居心地のよい場にどっぷりと浸かって安住するのではなく、愛する家族が主によって成長させて頂き、そこに又、新しい家族が生まれて主が喜ばれる大家族になっていくことができれば嬉しいです。それは主が導いてくださることですから大いに期待しつつ、更に新鮮な家族であることを願っています。

小宮シヨッフ様、ウウエ・ピシヨッフ

私事ですが、九月二〇日は私たちの結婚記念日でした。二〇年前のその日、私たちはケルン・ボン教会(建物はボンハッファー教会)で、当時の牧師であった南先生の司式の下、尾畑ご夫妻に証人となっていただき、また教会の皆様にもご参列いただき、(もちろん互いの両親や家族の者も参列して)、感謝のうちに結婚式を挙げました。二〇〇四年からしばらく日本で暮らしましたが、神様の導きでまたこうしてドイツの地に戻り、結婚二〇周年記念日は再びドイツで迎えました。そして今年の十一月、私たちの結婚生活のスタート地点であるケルン・ボン教会が創立四〇周年を迎えました。教会の四〇年の歴史を振り返れば、結婚生活と同様に順風満帆な時もある、いろいろな波風が立ったり嵐の時代もあったことと思いますが(現に、私が初めてケルン・ボン教会の礼拝に出席した時は無牧時代でした)、神様はこの教会を「自

分のひとみのように守ってくださっていることがわかります。この先も、どんなことがあっても主が共にいてくださり、私たちも主と共にありますよう祈ります。

シユミット亜弥子

四〇年前には、まだ私はケルンに日本語の教会があることを知りませんでした。

補習校で藤井姉と会いクリスマス礼拝に誘われたのが最初でした。家族でほんの時々祝いのある時に礼拝出席をしました。クリスマス祝いで、毎年「聖しこの夜」を歌いながら交換プレゼントをした事は、今でも子供達は覚えていています。

四人の子供達が自立する様になってからは、独り身の私なので日曜日は教会と言う生活が日常になりました。日本語での礼拝は勿論ですが、そこで日本人との交わりも私にとっては欠かせません。ドイツの社会に住んでも、日本語、日本食は心身にとって安らぎを得るものです。

独り言は神様との対話になり、一人ぼっちではなく、神様が一人一人について居られることを、もっと沢山の人が知ったらなと思う、クリスマス時期です。

佐藤ブルーベ導子

私の人生の遍歴と云えば教会を辿ると云うことにもなります。

祖父に手を引かれて神戸中央バプテスト教会に始まり、戦後中学生の時に洗礼を受けた東京三崎町教会、留学してロンドンのハムステッド・バプテスト教会、結婚式を挙げたミュンヘンのマタイ教会などその後数々の移転を重ねての教会の移動も中々激しいものでした。そんな放浪の旅路を経てたどりの着いたのが、このケルン・ボン日本語教会でした。

勤務先の同僚の方に連れられて、藤井さんの御宅での家庭集会がまずその始まりでした。それから数年後に娘の住むケルンに移ってから、定期的に出席出来る様になりましたが、外地における日本人教会は初めての私をそれは暖かく迎え入れてくださいました。この教会も四〇年の旅路を経てお祝い出来ることは本当に感謝です。また私がここに辿り着く迄どこにあってても常に神様と一緒に歩いてきてくださったことを実感を持って感謝しております。この教会の前途がいつも神様の御手のうちにあります様に祈り続けたいと思います。

外間久美子

私をはじめ教会を訪ねたのは一九八六年のイースター礼拝だったと思う。尾畑真知子さんの歌を聴くことが目的で

した。真知子さんのレッシェンを受けていた友人に連れられ二時間、遠いなーと思った事を覚えています。真知子さんのモーツルト作曲「ハレルヤ」には勿論、教会の皆さんの心暖かさに感動しました。それから祝いのたびに誘って頂き二年後のイースターに受洗しました。来年で信仰生活三〇年になります。ほんとに色々なことがありました。もし、ケルン・ボン日本語教会を訪ねなかつたら、神様を知らずにいたら、私はどうなっていたのでしょうか。離婚のとき、癌を告知されたとき、辛い治療生活のとき、どれだけ支えられたことでしょうか……。感謝の気持ちに満たされます。

藤井千恵

ケルン・ボン日本語キリスト教会は今年で四〇周年を迎えました。私は、三八年ほど前に両親に連れられて通い始めて以来、共に歩ませていただいています。九歳の時に幼児洗礼を受け、(地元のドイツの教会で友達と一緒に受けた)堅信礼に因んで祝福をしていただき、結婚式もこの教会で挙げました。早くからオルガン奉仕や翻訳・通訳もさせていただきました。その間、数多くの牧師先生、信徒の方々に家族同様受け入れられ、育てられたと言えます。私の日本語能力も、教会に通い、皆さんと日本語を話し、(口語訳)聖書を読み、日本語の賛美歌を歌うことによって、養われた訳です。(現地校に通った私たち兄弟の日本語は、両親の愛情のこもった厳しい教育、家庭での通信教育、聖書・賛美歌そしてドラえもんが元になっています。)私たちと違って、本帰国される方が殆どですが、ドイツの地に於いて、たくさんの方と出逢い、帰国や引越されながらも交流できることは、本当に幸せだと思えます。世界中にいらっしやる皆様、クリスマスおめでとございます。世界中にいらっしやる皆様、世界中に平和が来るよう祈ります。

尾畑秀治

ドイツに滞在して四一年の歳月が過ぎ、いま日本への本帰国を迎えようとしている。荷物や写真を整理するほどに、ケルンボン教会との歩みを思い起こす品々が出てくる。ケルンボン教会の礼拝に出席しては三八年、当然のことかも知れない。私たちの生活は礼拝に出席することから一週間が始まり、毎週新しい御言葉に生かされてきたが、それにも増して教会に集う方々と語り合い祈り合えた事が、何よりも強い支えとなって生活する事ができた。ケルンの地で私たちの小さな家庭が守られてきたのは、教会生活無くしては語り尽くせない。一人息子もケルンボン教会の中で成長できた。そして、私のような者を主はこの教会で用いて下さり、歴代の牧師方のもので役員という大任が与えられた。

いろいろな事が思い出される。楽しく嬉しいことも一杯あったが、なぜか苦しく悲しかったことが今でも心の内に顔を出してくる。そのような一杯詰まった教会生活の「コマ」コマを綴じて日本へ持ち帰る事になるが、ここで出会った兄弟姉妹のすべての皆さんに深く感謝の気持ちをお伝えたいと思っ

尾畑真知子

このクリスマス、住み慣れたドイツを後に、日本へ本帰国する事になった。二年間の予定で主に導かれ渡独し、「もつと居なさい」という声を聴きながら四一年が過ぎた。すべてが主の御計画の内であったように思う。その間、家族で教会に通う事ができたこと、その教会生活を通して主にある深い交わりが与えられ、多くの恵みをいただき、支えられたことを心から主に感謝したい。また言葉に表せない程の宝物をも

藤井隼人

まだドイツが統一される前、首都がボンにあった頃に中日新聞特派員として滞在されていた五十川達兄・美智子姉によって始められたボン家庭集会在、一九七七年一月、当時ボン大学留学中の牧田吉和牧師(現在日本キリスト改革派宿毛教会牧師)を迎えて同大学神学部学生寮にて第一回主日礼拝を始めてから今年で満四〇年。去る十一月二日に四〇周年記念礼拝が行われました。

私は一九七八年九月の転会以来三九年間当教会と歩みを共にして来ましたが、その間、分裂、解散の危機に見舞われ、皆で必死に涙の祈りを捧げたことも一度ならずありました。しかしその都度上から解決の道が示され、地元の州教会、日本基督教団の先生方を始め、内外の多くの方々のお祈りとご支援があったからこの四〇年、とつくづく思っています。個人的にも、困難や問題に直面する度に、苦楽を共にして来た信友に慰められ、勇気付けられて来ました。御心ならこれからも、当教会が旅人、寄留者のオアシスとして当地で益々用いられることを願い、佐々木先生や他の教会員の方々と共に、祈りつつ励んで行きたいと望んでいます。メリークリスマス!

ボンに於ける日本人教会(当初聖書集会)のスタートは、夫が銀行を辞めてケルン大学に入学し、家族四人が新しいスタートを切った時期とほぼ重なる。

藤井弘子

メンバーがケルンに引越越し、礼拝もデュッセルドルフ教会からボン集会に移る。一年後牧田吉和牧師が神学研究の場をオランダに移された後、私の母教会西宮教会から折しも牧会四〇年の感謝に一年間の休暇を得られた棟方文雄牧師が私的に、続く八ヶ月を西宮教会派遣宣教師として、誕生間もない羊の群れを父親のような厳しさで優しくさで指導して下さいました。

毎週の礼拝と諸集会、四〇年の間に実に多くの方々を教会を通して知り合いになった。豊かなその出会いは今も続いていて私達の宝となっている。月報の宛名に接する度に、皆さんとの親しい交流が甦る。教会の存在が在独四六年を支えて下さったと、唯々感謝である。教会をお支え下さっている皆さまに心よりお礼申し上げます。 Frohe Weihnachten!

張谷延河、麻帆、有振

教会の中にいる私は、自分が覚えていた最初の自分でした。私が幼稚園に行く前から教会に出席し始めた母親の影響で、教会は私の遊び場・学び場であり、生活の一部になっていました。しかし、中学校から留学のため一人暮らしを始めたことで、いつも通り日曜日に起こして教会に導いてくれる母がいなくなり、何年も主日礼拝を怠けた時期もありました。

そんな礼拝やお祈りをしない日々には、何故か心の何処かにすっきりしない気持ちが残る、世の中の楽しいことも虚しく感じる事が多々ありました。現在のように教会に通うようになり、神様を賛美し、如何なることにも感謝し、神様の同行を意識して生活する時は、真実な喜びを感じることができると改めて思いました。私にとって教会は、社会人になっても、家庭をもつても、少しでも寄り道をしようとする、また主の下に呼び直してくれ、その喜びを教えてくれる大事な場所であり、先生であります。

ドレーアー京子

渡独前に知人からいただいた聖書は、当初ドイツの習慣を知る為の辞書のようなものであった。

友人の稲葉さんご夫妻に誘われてボン集会に出席し、その後礼拝がケルンで持たれるようになった時、棟方先生の説教に導かれて教会に行くようになった。戦後奥様と二人で礼拝

を守られたという棟方先生のお話を覚えている。

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」という聖書の言葉が私は好きだ。

教会は社会の縮図で、様々な人が様々な思いを持って集まっている。それが、み言葉を一緒に聞き、讚美し、祈る時、私達の心はひとつとなるのだと思う。聖書が人生の道しるべである事を教えてくれたのは、ケルン・ボン教会である。外国にある日本語教会はどこでも同じだと思っが、教会員の移動が多い。

でもこの教会でめぐり会えた信仰の友が、日本のどこかで同じ聖書の言葉を聞いていると思うと、私は一人ではないのだという気持ちが湧いてくる。

ギョットケマン香子

一九七六年のある日、近所で出会ったのが牧田吉和牧師夫人の悦子さん。夫妻は我が家から歩いて二分ほどのボン大学神学部学生寮に家族四人で住んでおられた。夫妻と私は仲良くなり、悦子さんの買い物に付き添ったり、週に数回日本語で聖書を読むことも始まった。牧田家の二人の息子が寝入った頃、私は自分の娘たち三人を姑に頼んで牧田家に行き、日本語で思いっきりお喋りに花を咲かせた。私の夫が入院中で一人で悲しかった時など、毎晩牧田家に出かけ、慰められた。

当時私は早朝の新聞配達をしていたが、同じように朝ボン駅に向かうアジア人を見かけ、声をかけてみた男性が稲葉一(はじめ)さん(現日本キリスト教会柳川教会牧師)であり、奥さんの五十鈴さんが二人目の妊娠中に発熱し危険な状態に陥った時には私の家で祈りの会を持った(五十鈴さんは無事長女出産)。教会がケルンに移った頃、私は個人的に色々大変な時期でケルンに通えず、近所のドイツの教会に出席していたが、苦しい時にイエス様に助けを求めて光が見えた。その後、時々昔の教会の友達と電話で話している間にケルンへの往復が可能になり、今では礼拝出席が嬉しくて本当に幸せです。

クリスティーン・ユエン

二〇一一年三月一日から、ケルン・リンデンタール地区のボンハッファー教会で行われる日本語教会の礼拝に定期的に通っています。

きっかけは福島で起こった地震と原発事故でした。毎週日曜日の礼拝に教会の方々、佐々木先生と共に参加できる

ことをとてもうれしく、満足して、感謝しています。

小川オスナー良子

両親に連れられて教会に通っていた子供時代。学校の部活が忙しくなって教会から足が遠のいたが、大学一年の時に二カ月間アイルランドのダブリンで過ごし、ホストファミリーが教会に通っていたこと、ヨーロッパのキリスト教文化とその習慣に触れたことで、日本に戻りまた教会へ行くようになった。洗礼を受けようと思ったのはニューヨークのテロがあった二〇〇一年の年末だったが、両親の教会ではなく、渡独後、二〇〇五年にケルン・ボン教会で受洗した。教会での交わりとそこで出会った方々に支えられ、ドイツでの生活を感謝して送っている。

《お詫びと訂正》月報九・一〇月号(第四三八号)二ページ目、上段の左から三行目に、「五十川夫妻はバプテスト」とありますが、正しくは「五十川夫妻は穩健カルヴァン派」です。お詫びして訂正致します。

◇ 報 告 ◇

◇一月二日(日)は、教会創立四〇周年記念日独語礼拝をお捧げいたしました。礼拝では鷺尾洋氏によるフルート演奏、そしてボンハッファー教会から四〇本のバラの花束と祝辞を頂き励まされました。



◇一月二日(火)助言会議(Beratung)が行われ、ケルン外国人教会を新しく担当されている Hülstrung 先生方とよいお交わりをすることができました。

◇一月二六日(日)礼拝後、子どもたちと一緒に楽しいファミリーコンサートを開催しました。



◇二月三日(日)「牧師任期延長に関する」教会臨時総会が行われ、佐々木良子牧師の任期が二〇二二年三月末まで延長されることに決まりました。

◇ 予 告 ◇

クリスマス日独語礼拝 & 祝会

日時 12月17日(日)
場所 ボンハッファー教会
礼拝 14時~15時
ドイツ語訳あり
特別賛美 尾畑真知子姉
祝会 15時~16時
☆☆☆

子どものクリスマス礼拝 & クリスマス会

日時 12月10日(日)
場所 ボンハッファー教会
12時30分~

◇二月四日(日)の礼拝

ボンハッファー教会のクリスマス前夜礼拝の準備の関係から会堂を使用することができませんので、居住されている地域の教会で礼拝をおささげしてください。

二〇一八年 日独語新年礼拝&祝会

日時 一月七日(日) 礼拝一四時~

※ドイツ語訳あり、礼拝後祝会

◇二月四日(日)の主日礼拝は、浅野康牧師が説教をいたします。

◇三月の一月月間、佐々木良子牧師は宣教報告のために日本に一時帰国いたします。

◇月報は来年から季刊誌として、三・六・九・十二月に発行することになりました。

《礼拝》

主日礼拝

毎週日曜日・一四時

大人と子どもの合同賛美礼拝

第四日曜日・一四時

子どもの礼拝

第二日曜日・一二時半

《定例集會》

聖書を学ぶ会

第一・第三火曜日・一〇時 牧師宅

聖書を学ぶ会・入門編

第二・第四木曜日・一四時 牧師宅

ケルン集會

第二木曜日・一一時

メアブッシュ集會

月一回 藤井兄・姉宅

ママの子育ての学び会 第二月曜日・一三時 牧師宅

※日時はお問合せください

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会
Japanische Evangelische Gemeinde
Köln-Bonn e.V.

<主日共同礼拝>

会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche
住所: An der Decksteiner Mühle 1
50935 Köln (Lindenthal), Germany
電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)
時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00

<牧師> 佐々木良子 (Pfr' Ryoko SASAKI)

牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln
固定電話: 02234-9298792
携帯電話: 0151-2910 6278
Email: r310130s@yahoo.co.jp

<ホームページ>

http://koelnbonn.jp

<振込口座>

IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38
BIC: PBNKDEFF